

SCがアメリカや日本で発展した要因は「産業革命後の大量生産システム、大量販売システム、大量消費システムの経済システム」の確立を背景にして、次の3つの要素が付加された結果です。

①中産階級の出現

モノを買い、消費し、所有し、利用することが喜びと感じる「モダン消費」の主体となる「中産階級の出現」（1人当たりGDPが1万ドル前後）がSCの発展の基軸となります。

②車社会の実現

徒歩・自転車中心の時代から鉄道・バスの大量交通手段、さらに乗用車による交通手段の発展による「車社会の実現」（世帯保有率で50%前後）がSCの発展の基軸となります。

③地方から都会、都心から郊外への人口の大移動

経済の発展は、人々を労働者として地方から都会へ、さらに生活者として都心から郊外へと人口の大移動を起こさせています。この「人口の大移動」、特に郊外化現象は、SCの発展の基軸となります。

今、中国ではすさまじい経済の発展が続いています。車社会の実現や人口の大移動は行われていますが、中産階級の出現が数値的に明確ではありません。

中産階級はモダン消費の基軸となる消費人口であり、1人当たりGDPは10,000ドル前後が基準値です。

今、中国のGDPは、2010年に日本を追い抜き、世界第2位になりました。しかし、人口は日本1.27億人に対し、中国は13.41億人で約10倍であり、その結果、1人当たりGDPは日本の10分の1の4,382ドル（日本42,820ドル）でしかありません。

現状の中国の消費力は、13億人という超大規模なマーケットと毎年10%以上の成長力が原動力であり、まだまだ1人当たりの平均所得は、SCの発展基準である10,000ドルの半分以下（4,382ドル）です。

しかし、1人当たりGDPを為替レートではなく、実際の消費力を表す「購買力平価」で見ると7,519ドルであり、中産階級の所得基準値の10,000ドル前後の基準に充当します。

小売業や流通業の国内消費の基準数値は、為替レートで見るとより、購買力平価で見た方が客観的な判断ができると思います。

まさに、今、中国はSC時代に突入しています。アメリカがSC時代に突入したのが1950年代、日本は1970年代（アメリカの20年遅れ）、中国は2000年代（アメリカより50年、日本より30年遅れ）で、「小売業のSC化」（商店街や市場や一般店から、1つのコンセプトを持った小売業の複合集積化）が進んでいます。

また、中国は沿岸部と内陸部に大きな経済格差があり、中国の平均1人当たりGDPは4,382ドル（2010年度）ですが、為替レートで見ると沿岸部は8,000ドル以上になっています。推定ですが、中国沿岸部の購買力平価で見た1人当たりGDPは13,000～15,000ドルになっています。経済財政白書（2010年度）を基に、2015年度の中国の1人当たりGDPを推計すると13,000ドル（購買力平価によるGDPは17兆ドル）になります。まさに、2011～2025年は、中国の本格的SC時代とすることができます。

(株)ダイナミックマーケティング社⁺
代表 六 車 秀 之